国内難民モロ民族の子どものムジャ幼稚園の始業式。今も戦乱の中逃げ惑う世界各地の子どもたち。晴れ着で新学期に臨む日が待たれます。

ビラーン通信
115号
2023年10月25日発行

NPO法人ビラーンの医療と自立を支える会
（英文名略称・ＨＡＮＤＳ）
本部：〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町516-11
TEL & FAX:045-500-9151
E-mail:hands-mindanao@nifty.com
http://hands-mindanao.a.la9.jp/
郵便振替口座　00210-5-72693
加入者名：ビラーンの医療と自立を支える会

フィリピンと日本との近現代史を振り返る ― 支援の前提にあるもの ―

理事　武　井　美　雄

＜ 支援とフィリピンの人々の心情 ＞

私たちビラーンの会はミンダナオ島の貧困に苦しむ人々の自立を助け支援してきました。援助したいという会員の動機は様々なものがあり、フィリピンの子どもたちの姿を見て、何とか助けたいという純粋な気持ちを抱いた方が多いと思います。さらに年配の会員には、戦時中に日本軍がフィリピンの人々に多くの苦しみを与えたことへのしょく罪の気持ちもあるのではと推察しています。

私たちの会がＮＰＯ法人としての歴史にひと区切りをつけるこの時期に、支援の前提にあるフィリピンと日本の戦争について、振り返ってみましょう。

1941年12月22日に日本軍はフィリピンのルソン島に上陸しました。戦争の全体の被害としては、日本側戦死者50万人に対してフィリピン側100万人（フィリピン政府発表）、そのうち首都マニラでは10万人の死者と言われています。

＜ 戦争による加害 ＞

一橋大学社会学部教授中野聡氏はTBSラジオ荻上チキSession-22　2016年１月27日放送「天皇・皇后両陛下がフィリピン公式訪問。戦時中、日本軍は何をしたのか？」で戦争の加害について次のように解説しています。その一部を抜粋してみます。

中野　もともとフィリピンはスペインの植民地でしたが、1898年にアメリカに奪われます。その後、アメリカはフィリピンを独立させる方針に転換して、1935年には自治政府が発足、その10年後には独立することが決まっているなかで太平洋戦争が起きたのです。その結果、日本はフィリピンを占領し、首都マニラを占領していきました。

荻上 そうした中で「事件」と呼ばれるものもいくつかあったようですね。

中野　はい。事件の事例は多数にのぼりますが、具体的にイメージを持っていただくということで一つ挙げるならば、ラ・サール大学の事件がよく知られています。これは今もマニラ都心部のタフト通り沿いにあるカトリック系の大学です。頑丈な建物だったので、ドイツ系の修道士やスペイン系の人々、フィリピン人などが避難していました。このまったく無抵抗な人たちが、突然乱入してきた日本兵に銃剣によって惨殺されたのです。

それからもう一つ挙げるとすれば、ベイビュー・ホテル事件。このホテルは、占領中、日本軍が宿舎としても利用していました。エルミタというマニラ都心部に避難していた市民の中から日本軍が女性を選んで連行し、ベイビュー・ホテルに集めて集団レイプが横行したという事件です。この事件は日本軍の戦時性暴力の最悪の事例のひとつとして記憶されています。この二つの事件は被害証言もしっかり残っています。

＜ フィリピンの人びとの憎しみを解いたもの ＞

続けて、中野氏はフィリピン人の日本への憎しみが解けていく経緯を語っています。そのきっかけは、日本の遺族がフィリピンの戦場で亡くなった日本兵の慰問をしたことにありました。1960年代半ば以降、遺族が自分の子どもや親が死んだ戦地を訪れ、各地で現地の人に直接会って迷惑をかけたことを心から詫びました。その日本人の姿を見て、フィリピンの人びとの心の中に、日本人を赦す気持ちが芽生えたそうです。慰問活動は活発で400を超える慰霊碑が建てられました。こうした先人の地道な努力が韓国に比べて比較的良好な両国の関係を築いてくれたというのです。

不幸な戦争の歴史も事実として認識し、若い人たちに伝える努力が二度と戦争を引き起こさないことにつながります。ビラーンの活動も、互いに心を通わす交流が根底にあると考えています。